

令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要 【信州大学教育学部附属長野3校】

目的・目標

- 通常の学級の中で知的障害のある児童生徒とない児童生徒が互恵的に学ぶための条件を明らかにすること
- 汎用性のあるインクルーシブな学校運営モデルを提案すること

学校運営連携校

信州大学教育学部附属特別支援学校
(対象:知的障害)
信州大学教育学部附属長野小学校
信州大学教育学部附属長野中学校

併設型

カリキュラム・マネージャー

A:元学級担任(教務主任)、実務家教員(長野中)
B:元学級担任(主幹教諭、全校研究主任)、実務家教員(長野小)
C: 元学級担任(全校研究主任)、実務家教員(特別支援学校)

取組概要

○交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の場

日常的な交流の促進、通常の学級における教科や領域、総合的な学習の時間等の授業を共同で行う。

→インクルーシブな授業の実施

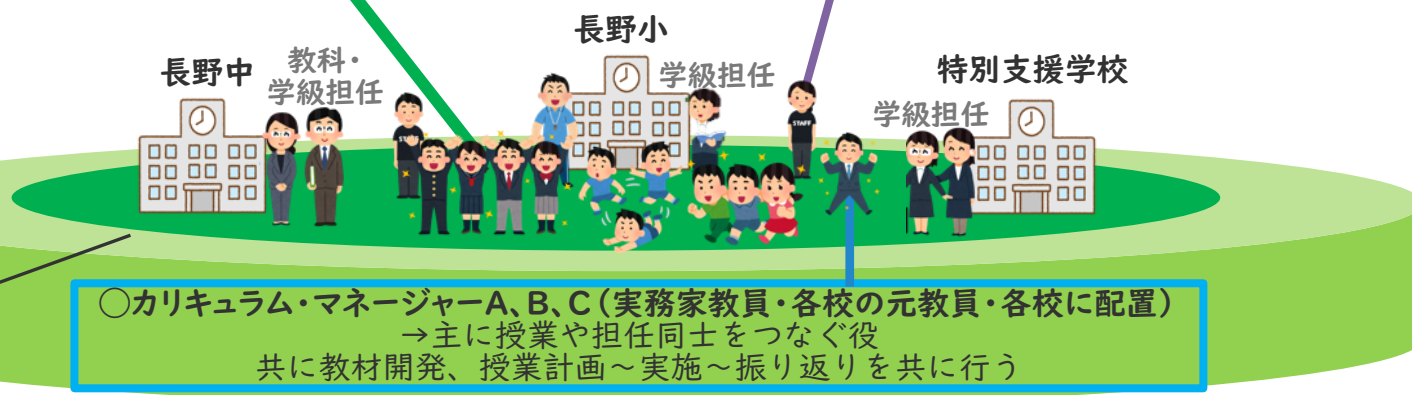
○インクルーシブアシスタントスタッフの配置

→日々現場に入る循環役、3校全ての児童生徒と関わりをもつ、情報収集、代替・教材準備補助、合同で授業を行う際の児童生徒同士の仲介役

信州大学 | 教育学部
SHINSHU UNIVERSITY



○大学、教職大学院
学生や教員の派遣等、
実践的サポートを行う



○カリキュラム・マネージャーA、B、C(実務家教員・各校の元教員・各校に配置)

→主に授業や担任同士をつなぐ役
共に教材開発、授業計画～実施～振り返りを共に行う

「インクルーシブな学校運営ミーティング」の開催

(長野地区統括長、各校管理職、大学教員、カリマネ等 参加)

- 連携スケジュール管理
- カリキュラム開発(日課、年間行事計画、動線、使用教室等の調整)
- 教員のファシリテート(授業計画、交流計画のための会議の設定、教員の連携の推進)
- 研究の推進(研究のスケジュール管理、調整) ※ 対面会議、チャットの使用等

○連携協議会(外部有識者等の参画)

一体的運営の方針や研究の目的に沿って、
ポートフォリオを基に、実践を専門的な視点で
捉え、理論的サポートを行う

令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要 【信州大学教育学部附属長野3校】

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

【方向性とねらい】

- I 校種の異なる教員の連携の仕方、どのような授業が実施できるか、各校の教育課程上のねらいと評価を学習指導要領に即してどのように明確化するかなどについて明らかにし、今後の授業づくりに生かす
- II 図画工作・美術、体育・保健体育といった小中学校の教科の授業に特別支援学校の児童生徒が参加する授業づくりを行い、知的障害のある児童生徒が参加することで、これまでの授業づくりと比較して、どのような点が変化したかを明らかにする

【実施した授業の一部】

- 長野小3年生と特別支援学校にじ組**（全12回／主な教科等：小→図工・特別活動・総合、特支→生活・図工・生活単元学習）
主な内容：両学級の中核活動、児童の興味・関心を基に、「『小坂さんの土』を使って記念のタイルを作ろう」の単元を構想、実施した。一緒に遊ぶ、タイルアートに挑戦する、土をこねて粘土にし、陶芸家の協力を得てタイル作りを行う等に取り組んだ。
指導内容や指導方法の工夫：活動への見通しや内容の具体的理解に向け、共通の「もの（タイル等）」を介す活動を設定した。
- 長野中2年生と特別支援学校中学部1～3年生**（全11回／主な教科等：中→特別活動、特支→国語、数学、理科、社会、保健体育、音楽、美術、職業家庭（主に各教科等を合わせた指導〔生活単元学習〕で実施）
主な内容：互いに考えた活動でレクリエーションを行う、中学部生活単元学習「みんなで楽しもう！あさひのスマイルゴルフ大会」において、用いる道具を共に制作する、制作した道具を使ってゴルフ大会を楽しむ、お別れ音楽会で合同合唱をするなどした。
指導内容や指導方法の工夫：主に関わる生徒が分かりやすいようにペアを組み、継続的に関わる場面を設けた。生徒同士の関わりへの促進に向け、教師は過度な仲介はせず、活動を共にを行い、生徒の様子を見て、必要に応じて仲介しすることを心掛けた。



②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

【両校の教員等によるチーム・ティーチングの実施】

- 授業構想段階**：各学級の児童生徒の様子や興味・関心、願いを踏まえ、どのような活動や工夫があれば学習が成立しそうかアイデアを出し合った。用いる材や活動場所等の事前確認も共に行なった。
- 授業段階**：中心となって進める教員、個々をサポートする教員（誰がどの児童生徒やグループに関わるか、どのように関わるか）という役割を確認し、連携して授業を進めた。
- 振り返り段階**：実施した授業における児童生徒の姿から、成果と課題を確認し、次の授業のねらいや活動、手立てを立案した。
- ・教員の過度な負担軽減のため、カリキュラム・マネージャーが調整を行い、教材研究や教材準備を共に行なった。

【校種をまたぐ出前授業の実施】

- ゴルフ大会で用いる道具を共に制作する前に、特別支援学校中学部教員が中学校2年生教室で事前授業を行った。授業では、中学部生徒がゴルフ大会に向けて必要なものを制作していることを伝えたり、実際に制作しているゴルフクラブや材料・道具を示して、ゴルフや制作の体験をしたりした。

【3校合同研修会の実施】

- 楠見（信州大学、共同研究者）による講演会「『子ども』のための教育へ；なぜ、インクルーシブ教育か」と3校教員の混在したグループによる意見交換会（感じたこと、今後できそうなことや課題）を実施した。

【実施状況の共有】

- 各校の管理職とカリキュラム・マネージャーの連携のもと、インクルーシブな学校運営事業に関わる資料配布や説明、視察報告や実施状況などの共有、意見交換、実施希望の把握などを行なった。



令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要 【信州大学教育学部附属長野3校】

本事業 の成果

【長野小3年生と小学部にじ組の授業から】

図画工作のタイルアートの授業において、様々な色や形のタイルを板に敷き詰める際、にじ組児童がタイルを指で弾いて飛ばして置く姿を見た長野小児童が、「おもしろいやり方だね。私もやってみよう」といってそのやり方を取り入れた。さらに、「もう少し遠くから飛ばして置いてみよう」「僕は斜めからやってみる」などといってやり方にアレンジを加えながら取り組む姿があった。このように長野小児童がにじ組児童の取り組み方を見て、取り入れたり、アレンジを加えたりする姿は別の授業でも見られた。これらの姿から、多様な集団で学ぶことの意義として、児童が取り組み方の幅を広げていく可能性があることが示唆された。さらに、にじ組の児童が、自分から長野小の児童に話し掛けて関わりのきっかけをつくり、やりとりを重ねるなどの姿が見られた。これらの姿から、インクルーシブな授業は、より実際的な状況の中で人間関係やコミュニケーション等の自立活動に関する内容を学ぶ場にもなりうることを示唆された。



【長野中2年生と中学部の授業から】

ゴルフ大会に向けての共同制作において、中学部Cさんは休憩で座る椅子を制作し、ちょうどよい大きさの背もたれを付けたい願いをもっていった。中学生DさんとEさんは学級の椅子の座面と背もたれの比率を参考に図に書いたり、計算したりして大きさを導き出した。Cさんはその寸法で木材を測って切り出し、椅子を完成させた。

このように長野中学生が教科等で学んだことを目の前の課題に応用して活用したり、中学部生徒が実際の場面で必要な教科等の内容を学んだりする姿は別の授業でも見られた。これらの姿から、交流及び共同学習の意義として、生徒の教科等の学びの広がりや深まりにつながる可能性が示唆された。



【各校教員の専門性の発揮】

「美術（交流及び共同学習）」の授業づくりを通して、中学校美術科教員（美術の専門性）と中学部教員（生徒理解や手立て構築の専門性）がそれぞれの専門性を活かし、意見交換を重ねながら授業づくりを進めてた。結果、多様な子どもを前提として授業を構想することにつながり、生徒たちがイメージを想起し、さまざまな表現がうまれるきっかけとなるように、材料の量や形、種類を大幅に増やすといった新たな工夫が生まれた。



課題と 今後の 展望

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

・教育課程上の位置付けの一層の明確化

今年度は主に特別活動や総合的な学習の時間、図画工作・美術での位置付けを見出した。今後、小中学校の教員は主に教科の専門性を、特別支援学校の教員は主に児童生徒理解や手立ての充実といった専門性を共に発揮した授業づくりが求められる。

・知的障害のある児童生徒とない児童生徒が互恵的に学ぶ条件を一層明らかにすること

児童生徒が共にに関わり合いながら、主体的に活動に取り組む交流及び共同学習の授業づくりが実現した。一方で、その成立条件が不明確な部分が多い。般化に向け、分析を進める。

・インクルーシブな視点を取り入れた授業改善

交流及び共同学習の授業にとどまらず、日常の授業においても、インクルーシブな視点を取り入れた授業を実施し、改善を進める。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

・3校の組織的運営に向けて

今年度は、主にこれまでの教員配置等を生かした形で実践を行なった。来年度以降は、今年度の実践を踏まえ、3校の組織的運営につながる工夫をさらに実施する必要がある。

・教員の業務や負担の増加への一層の配慮

今年度は初めての取り組みであり、連携面での模索が多かった。結果、ミーティングや教材研究、情報共有、意見交換等に掛ける時間が増えてしまった。円滑に進めた事例を踏まえ、般化していく取り組みが求められる。

